http://f-env.sakura.ne.jp

府中かんきょう市民の会

NPO法人　府中かんきょう市民の会々報
2015年 冬号　1月14日発行 通巻55号
発行人：竹内　章（府中市分梅町）
TEL 042-364-3428

市制施行60周年記念顕彰式で感謝状授与

府中市は昭和29年に市制を施行し、昨年の平成26年4月1日で市制施行60周年を迎えた。
昨年の10月19日に開催された記念顕彰式で、NPO法人府中かんきょう市民の会（以後、当会）が「多年にわたり環境保全の推進に尽くし、良好な生活環境の確保と市政の推進に寄与した」との趣旨で、高野市長より「感謝状」が授与された。

当会は、平成11年(1999年)4月に環境市民団体として設立し、この間、15年間にわたり各種環境保全活動を行って参りました。以下は具体的な活動です。

(1) 市民を対象にした環境意識の向上を目的として、公園や多摩川河川敷で植物や野鳥の観察会を開催したり、また、子供たちを対象に、小川の生き物調査や「空気の汚れはかる君」を使って大気汚染(NO2)調査などを開催してきました。特に、NO2の大気汚染調査は、市内の主な交差点で平成14年から行っており、平成26年からは市内の交差点30か所で年4回測定を行い、汚染状況の把握に努めています。

(2) 緑地や農地を末永く保存していくために、田んぼにレンゲ草の種をまき「レンゲまつり」を14年間続けて開催したり、緑地としての農地をこれからも保存して行けるように、高齢者の農家を対象に約20名の援農ボランティアを10年以上派遣しています。

(3) 市民や子供たちの環境学習として、東京農工大学の協力を得ながら「田んぼの学校」を開催し、田植えから稲刈り、脱穀と籾摺りまで体験できる「米づくり体験」などを9年間行ってきました。

(4) 市内の緑地保全活動として、府中崖線保全活動を平成11年の会発足当初から続けています。特に、崖線の西側の「西府崖線(ハケ)」においては、「東京の名湧水57選」に選ばれている「西府町湧水」の湧水量や水質の調査を平成17年から開始するとともに、平成23年秋から春と秋の年2回清掃活動を開始するとともに、同年の5月から毎年「わき水まつり」を開催して、講演会の開催や西府崖線のハケ下で崖線に自生する樹木や動植物の生態調査結果のパネル展示を行い、市民にPRしています。

また、平成17年10月から、市の許可を得て「四谷下堰緑地」の保全活動 (※1)を開始し、ヒガンバナの移植や清掃活動、樹木の名札づけなどを行うと共に、平成22年5月22日の「国際生物多様性の日」には「グリーンウエーブ(※2)」に府中市として初めて参加し「植樹祭」を開催致しました。

平成14年4月から、市内の公園美化を目指して市の公園4か所(平成25年度から3か所)の清掃活動や落ち葉の銀行にも参加すると共に、押立町緑地では市民花壇づくりも続けています。

※1 保全活動は平成26年度より「下堰緑地の会」に移管
※2 同日・同時刻に世界で植樹を行い、緑の波をイメージしたもの

11月定例会終了後、府中かんきょう市民の会（団体）に感謝状を、竹内理事長（個人／前から3人目）への表彰状を手に記念撮影

一方では、**(5)** 環境審議会や各種環境分野の協議会などに委員を派遣して、府中市環境基本条例や府中市環境基本計画などの素案作りに参加して、環境行政の推進にも貢献してきました。さらに、府中市が主催する「環境フェスタ」や「環境まつり」に実行委員会を派遣して、企画・運営に協力して参りました。

この他にも、**(6)** 各種環境問題シンポジウムの開催、府中基地跡地に移転が予定されていた「国立医薬品食品衛生研究所」移転の反対運動、市内の環境改善や自然保護に向けた陳情・要望など数々の提言活動も行って参りました。

このような一連の活動が評価され、理事長の私個人にも「環境保全功労」の部門で表彰状が授与され、、大変名誉な事で嬉しい思いを致しました。また、昨年10月に発行された「60周年記念誌」にも「市民の力がきらりと光るまち、府中」の中で、特に活発に活動している代表的な市民団体として紹介されました。

これからも、当会の会員とともに、市内の環境保全活動に微力ながら貢献して参りたいと思っております。

（理事長　竹内　章）

脱穀・籾摺りの巻　楽しかった田んぼの学校

実　施	平成26年10月12日（日）　9:10～13:00
場　所	東京農工大学 本町実験農場
天　気	好天 無風
参　加	生徒26人　保護者25人
スタッフ	市民の会9人　府中東高校8人　東京農工大1人　など20人

いい天気での農作業

第4回田んぼの学校は、当初懸念された台風19号も本土接近が遅れ、風もなく、暖かな日和の中で、農場の道路部分に機械を出して、脱穀（だっこく）籾摺り（もみすり）の作業をすることができました。

当日の作業は、農工大の電動の機械を使って行ないましたので、子どもの体験中に脱穀の全部と、籾摺りは約1／3程度を終えることができました。

昼過ぎには全ての籾摺りまで終えることができ、収量は21．8kgでした。東京都の平均収量は10アールあたり450kgだそうですから、面積当たりの効率は15.7％程度のようです。

農業としては採算割れの収量ですが、農薬をまったく使わず、すずめが自由に食べた後の収量としてはまあまあかもしれません。

※脱穀とは、稲刈りした稲穂を乾燥させた後で、籾（もみ）と稲わらとを分ける工程、籾摺りとは殻（から）がついた籾を玄米と籾殻（もみがら）に分ける工程をいいます。

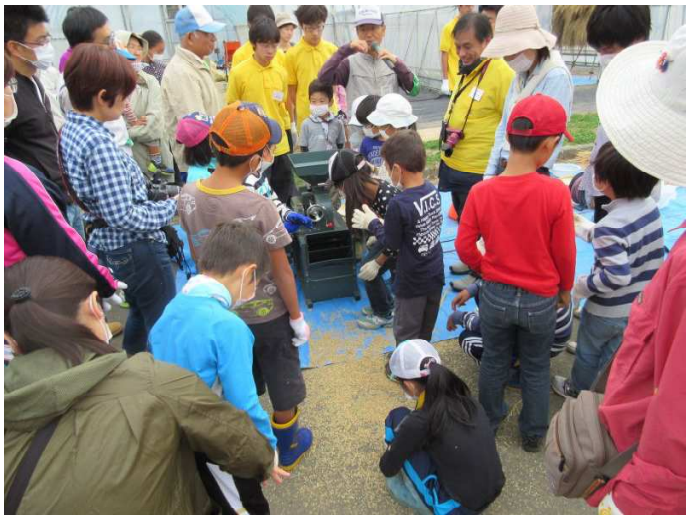
スタッフと一緒に脱穀する小学生

一部残った稲刈り・ハサかけを体験

9月28日の稲刈りでは、一部補植した稲の生育が遅れて作業を残していましたので、脱穀には参加できた子ども（9月28日に欠席）に、稲刈りハサかけを体験させることができました。

脱穀・籾摺りの体験

脱穀機、籾摺り機いずれも1台で、指導する大人側の操作通りにはスムースに動いてはくれず、頻繁にストップするベテランの機械の対応などに手間取り、当初1時間程度を予想していた作業時間は、全員が終わるのに約1時間半ほどかかりました。



おっかなびっくり、籾摺り機をのぞきこむ小学生

子どもや保護者のアンケートでは、「脱穀、モミすりが楽しかった。収穫後お米ができるまで大変な手間がかかっているのを実感した。お米ができるまで体験できて良かった。大人も子どもも貴重な1日になりました」とのコメントをいただきました。

もし、作業が流れ作業でスムースに終わっていては、こうしたご意見はなかったかもしれません。

ハサかけをしていたビニールハウスの中から、外に設置した機械までの稲わらの運びだし、機械のまわりに飛び散った細かなワラやモミガラの清掃を手伝ってくれた子どもがいました。

また、機械の吹き出し口付近で遊ぶ子どももあり、前回同様田んぼやあぜで虫さがしに熱中する子どももいて、予定の時間を過ぎても暇を持て余す子どもはほとんどいませんでした。

バケツ稲の脱穀・籾摺り

各自宅で成育したバケツ稲の脱穀・籾摺りの方法についても、百均ショップで売っているすり鉢を使って、籾摺りの説明を行ないました。

手作業での籾摺りはかなりの労働量で、第2次大戦中の経験のあるスタッフや、その後の世代でも小学校の授業で体験した人もおり、大変さはそれなりに伝わったようです。

（小西信生）

田んぼの学校
収穫祭・修了式の巻

収穫したお米で美味しいオニギリづくり

収穫祭・修了式に100名参加（11月16日）

今年で9回目の開催となりました「田んぼの学校」（府中市受託事業）の収穫祭＆修了式が、楽しく盛大に行われました。

日　時　　11月16日（日）　9:00～13:30
会　場　　中央文化センター
参加者　　生徒27名、保護者41名　計68名
来賓・ボランティア・スタッフ　　計32名
府中市生活環境部　　4名
国立大学法人　東京農工大学　　4名
都立府中東高等学校　生物部　　5名
田んぼの学校ボランティア　　4名
府中かんきょう市民の会　　15名
（ 総計100名が出席）

自然の恵みの大切さを、親子で体感

今年の田んぼの学校は、5月25日の開校式・田植え、7月6日の草取り・生き物探し、9月28日の稲刈り・ハサかけ、10月12日の脱穀・モミすり、そして11月16日の収穫祭・修了式の計5回、行われました。半年間の田んぼの学校を通して小学生中心の33名の生徒さんは、自然の恵みの大切さ、みんなが力をあわせることの楽しさを、親子そろって体験することが出来ました。

収穫祭・修了式当日朝8時、会場に一番乗りしたのは、今回の学校を、若い力で支えて頂いた府中東高校生物部の皆さんでした。朝9時から受付が始まり、参加者は、受付順の希望により、オニギリ作り体験、豚汁作り体験、会場設営・花づくりの3コーナーに分かれて、準備を開始しました。この日のオニギリのお米は、勿論、今年田んぼの学校で作ったお米です。どのコーナーも保護者の方々の大きな応援を頂き、予定より早く準備を完了しました。10時過ぎから、会場では府中東高生によるバルーンアート、塩づくりの紹介や手遊びなど、楽しいイベントが行われました。

「いただきます！」と、感謝の言葉のあとに、食事が始まる

農工大 大里先生、市生活環境部長が祝辞

11時30分に、収穫祭・修了式が始まりました。冒頭に、主催者の市民の会の竹内理事長から「府中の農地は年々減少しており、この学校をとおして、身近な環境問題を考えて下さい」との挨拶がありました。

次に、本事業を市民の会に委託している府中市の今坂生活環境部長から挨拶を頂き、田んぼの学校を1回目から支援、協力頂いている東京農工大学の大里先生、福田先生から「農耕風土に繋がる日本のお祭り」などについて講話をかねた挨拶がありました。

修了証の授与、緊張しています

記録ビデオ上映、絵日記発表そして修了式

お昼前、環境政策課の加藤課長が呼びかけ、全員の「いただきます」の感謝の言葉で食事が始まりました。

自分で育て、自分で握ったオニギリを食べるのは、ほとんどの方が、初めての経験。会場には「美味し～い」の声があふれました。具がいっぱいの温かい豚汁も大人気、おかわりが続出し、完食しました。

食事の後は、田んぼの学校の記録ビデオの上映会、田んぼでの楽しい思い出に歓声が湧きました。続いての、絵日記と作文の発表では、生徒、保護者から「参加してよかった」の声が続きました。そして修了証の授与。写真入りの修了証書が、生徒一人一人に手渡されました。式の最後には、加藤課長と農工大大平研究員から「将来は農工大、府中市役所に入り活躍して下さい」等との講評を頂き、収穫祭・修了式は、13時30分に閉会になりました。

第9回田んぼの学校の参加者、農工大、府中東高、ボランティア、スタッフの皆さんに心から感謝いたします。

（村崎啓二）

西府崖線　ハケ周辺の歴史・自然遺産めぐり

日時　平成26年11月24日（月／振休）　10:00～12:00
場所　NEC府中事業場内一里塚⇒西府崖線湧水他⇒熊野神社古墳
天候　曇り　微風　気温12.4℃～13.2℃

天候は曇りでさほど寒くもないなかで、「西府崖線（ハケ）周辺の歴史・自然遺産めぐり」を行なうことができました。

朝10時にNEC事業場正門前集合としましたが、当日朝までに一般市民からの申し込みは2人しかなく、若干悲観的な気持ちで主催者側はいましたが、一般参加15人、会から9人、合計24人の参加をいただくことができました。

かんきょう市民の会定例会での会員への告知、ハケ・用水・わき水通信14号（11.01）、府中市広報（広場欄11.21）では、一般市民に向けた告知・募集を行いましたがうれしい誤算でした。

市広報を見てのご参加が多かったようですが、「当日直接集合場所へ／問合せは同会・葛西まで」としたことで、事前申し込み不要と判断して、ご参加いただいた方がほとんどだったとの状況でした。

進藤案内人（石碑の右横）がNEC内の「一里塚」を説明

歴史・自然遺産についても、普段一般市民は入ることができないNEC府中事業場内の、本宿一里塚を見学ツアーに入れることで、直近の告知にもかかわらず、多くの参加をいただくことができたのだと考えます。

全行程徒歩ということもあり、時間は2時間として、ぴったりの見学ツアーとすることができました。

見学ツアーの旅程は以下のとおりです。

10時NEC正門前集合
府中市史跡 甲州街道本宿一里塚（※1）（NEC内）/20分
⇒市川用水沿い「カッパ池」⇒西府崖線緑地
⇒西府町湧水（※2）⇒御嶽塚古墳/60分
⇒熊野神社古墳（※3）・同展示館観覧/40分～12時解散

※1　甲州街道本宿一里塚は、江戸時代に甲州街道が敷設された当初の街道沿いに設置されていたもので、江戸日本橋から８里（約32km）の位置にあたります。
その後の多摩川の洪水で、甲州街道は現在のハケ上に変更になりましたが、当初本宿付近はハケ下を通っていたものです。

※2 西府町湧水は西府崖線に自然に湧き出している府中市では唯一の湧水で、東京都の名湧水５７選にも選ばれています。
今年10月にリニューアルした郷土の森博物館本館には、西府湧水のジオラマも展示されています。

※3 熊野神社古墳は、武蔵の国の国府が現在の府中に置かれる（703年）より以前、7世紀の中ごろ～後半に作られた、上円下方墳という数少ないタイプの古墳です。
規模は下方墳の一辺が約32mと現在までに発見されている上円下方墳の中では最大級のもので、国史跡に指定されています。

竹内案内人（右から4人目）があずまや前で「ハケ」の説明

各々の歴史・自然遺産の説明は、会のメンバーが行ないましたが、近所に戦前から住み続けている会員から、「子どもの頃（NECの工場になる前の時代）に一里塚・ハケ周辺で遊んでいた」との貴重な追加の説明もあり、御嶽塚古墳（西府文化センター横）については、一般で参加された府中観光ボランティアの市民の方から説明していただくなど、和気あいあいの見学会となりました。

西府の「ハケ・用水・わき水」を後世に残すためには、より多くの市民に知っていただくことが必要です。

小西案内人（左端）が「カッパ池」の説明

そのためには自然遺産にテーマを絞ったツアーより、自然（西府ハケ、湧水、用水）と歴史遺産も地域資源として市民にPRすることが有効であるとの想いで企画したもので、今回は十分その目的を達成することができたと言えるでしょう。

（小西信生）

バス見学会「国立歴史民俗博物館」に参加して

10月2日、曇り空のなか、総勢41名を乗せて大国魂神社前を出発。

途中“第14回レンゲまつり”や“西府湧水まつり”等のDVDを見ながら一路、千葉県にある「国立歴史民俗博物館」へ。

元々は佐倉城のあったところ、広大な敷地に堅牢たる建物が。なかの床面積も広く、第1から第6まで（縄文から現代）それぞれに区切られて展示室が配置されています。じっくり見たら丸一日でも足りないくらい。「一泊したい！」の声もあったくらいです。

国立歴史民俗博物館の入口

模型やパネル、出土品、ジオラマでその時代に生きた民衆や武家、豪農等の暮らしぶりがわかりやすく展示されています。

縄文時代はサラッと通り過ぎるつもりでしたが、意外にもここの展示が面白かった。この時代にはもう漆の技術が発達していたそうで驚きです。土偶はどれもユニークで数も多く集められていました。ほかの時代の模型品もとても精巧で、大きさも十分で家の作りがよくわかるように半分屋根を外した形になっています。周りの畑や厩、寺等も配され当時をうかがい知ることができます。

第4会場では、いきなりの「おせち料理」の展示です。こちらは特に「民俗」のコーナーです。全国の風俗や祭事、流行等別の面からも見ることのできる工夫がされています。「神」への怖れから生まれた独特の信仰、まつり、妖怪やカッパ伝説等もその現れかもしれません。“カッパ”が結構リアル（？）でした。

江戸のコーナーでは「寺子屋」を開設。係の人が熱心に説明され、私も昔の「かな文字」で名前を書いてみました。おどろおどろしい絵巻物をのぞく仕掛けもあって、もう少しじっくりと見てみたいところでした。

「戦争の時代」では、ここがかつて練兵場があったことがその展示物で現され、その後にこの博物館が建てられたということがわかります。これはこの博物館のもう一つの特徴かもしれません。

バス中での光景

私は大急ぎで見てしまいましたが、2つの会場くらいしか回れないほどしっかりと見られた方もいました。本当はそうすべきでしょう。何回も来たことがあるというヘビーリピーターの方もいらっしゃいました。

実物大（？）のゴジラを最後に有志の人たちで「くらしの植物苑」へ。ここでも「食べる」「治す」「織る・漉く」「染める」「道具を作る」「塗る・燃やす」という6つのテーマごとに植物が植えられ、「え～これ食べられるの？」「これで布が作れるの？」「薬になるの？」と見学者からの驚きと歓声でワイワイガヤガヤ楽しいひとときでした。

「くらしの植物苑」前にて記念撮影

私も「ムカゴ」を拾ってお米と炊いてみました。独特の味わいですよね。梅沢さんは、子供たち向けの暮れの会用の「リース作り」にと、落ちている木の実等を採集していました。どこまでも熱心な方！（笑）

バス中も普段あまり話したことのなかった会員さんと会話が弾み、疎開先でのくらし等いろいろ教えていただき、懇親も含め有意義で楽しい一日を過ごすことができました。世話人の皆様、お疲れさまでした。　（内田ひさ子）

コミュニテイーガーデン

畑（はたけ）の学校

援農ボランテイア活動の延長として、農園主の好意で開設した“畑の学校”はすでに5年を経過しました。

その間の活動は、次のように様々に紹介されました。

①「府中市シニアガイドブック」／府中市市民活動支援課（H21．3発行）

②「広報ふちゅうの1・2・3市民」／特集NPOボランテイア団体（H22．4発行）

③「地域も、自分も元気になる本」／NPO法人府中市民活動支援センター（H25．3発行）

④さらに年1回、“畑の学校”の後援団体「NPO法人府中かんきょう市民の会」の会報に活動報告を掲載。

畑の学校のサツマイモ堀

押立町にある農園主の限られた畑地に入園を許可された者が、組織した“畑の学校”に所属し、会則に従い野菜つくりに励みます。

基本原則は、かんきょう循環型農業をめざし、共同耕作で、収穫物はみんなで分けることです。苗を買わず、種子から育てる。運営方式は試行錯誤中で、未だに苦労しています。楽しいコミュニテイーガーデンで、援農ボランテイアと農業愛好家の養成を目指しています。

“畑の学校”の良さは、同じような市民農園と比較して、共同作業であるので、指導する人がいて、教え合う。栽培しなかった野菜も入手できます。また、体験農園と比較してより広く野菜栽培ができますし、授業料（2,500円/年）も安いです。

“畑の学校”で栽培しているものです。旬のものなら何でもありです。

・豆　類…えんどう豆　インゲン豆　枝豆　そら豆など
・根菜類…じゃがいも　サトイモ　カブ　ダイコン　ニンジン　ゴボウ　サツマイモなど
・葉菜類…タマネギ　ネギ　ワケギ　シュンギク　キャベツ　ホウレンソウ　小松菜　ブロッコリー　べんり菜（小松菜ににている）

畑の学校の「皇帝ダリア」満開　2014年11月13日撮影

・果菜類…トマト　キュウリ　ナス　ピーマン　オクラ　カボチャ　トウモロコシ　ニガウリなど
・果物類…スイカ　イチゴなど

変わったものに、皇帝ダリア（写真上）　八升豆　ツタンカーメンのえんどう豆　パンダ豆　白ナスなども栽培しています。

会員は、日曜班と木曜班に分かれていますが、第3日曜日は全員登校日ときめ、仲間意識を高めます。会員の交流に気配りし、イベントはこの日に行うようにしています。

最大のイベントは　“スイカ祭り”です（写真下）。スイカが成熟するのが8月の初・中旬です。昨年は8月3日（日）の12:00に開催しました。

前もって農家の冷蔵庫に保存してもらい、テントを張り、水撒きし、涼しくしてかぶりつく。この笑顔は、生産に携わった人だけに味わえるものです。

スイカ祭り

この喜びをもっと多くの人に体験してもらおうと仲間を増やし、栽培に努力しようと自らを励ましています。仲間になりませんか！　お問い合わせは以下です。

竹田　勇（畑の学校長）
☎　364－3623
メール 6354kjti@jcom.home.ne.jp

「農」に取り組む市民団体が一堂に集い、議論

～三多摩自治体学校 in 府中「地域で支える都市農業」開催～

「三多摩自治体学校 in 府中」のあらまし

さきごろ府中市内で、「三多摩自治体学校」が開催されました。

これは、多摩地域の住民・自治体職員・研究者などを対象に、「住民自治」について、さまざまな側面から議論し合う学習会で、今回で30回目を迎えます。

今までは主催団体である「NPO多摩住民自治研究所」の関係者が中心に企画をしていたようですが、今回は幅広い市民や団体の協力を得て作り上げていくことになり、私にも実行委員会参加の依頼がありました。

2014年11月1日（土）には、東京農工大学で、約200名の聴衆が集まり全体会が開催され、ジャーナリスト高野孟（はじめ）氏の講演、高野律雄府中市長と佐藤健飯田市副市長による市民協働推進に関する対談などが行われました。

市民の会の西宮（手前）と竹内（右から3人目）

「都市農業」を取り上げるのは初の試み

同じく12月13日（土）には、10の分科会が開かれました。

このうち、私が担当した分科会は「地域で支える都市農業」です。聞くと、いろいろなテーマを取り上げて来た「自治体学校」において、都市農業に関する企画を実施したことはかつてなかったとのことです。したがって、どういった切り口で何を議論するべきか、ノウハウもありません。

そこで、当会の竹内理事長と竹田勇さんに、全面的なご協力をお願いし、農地の多面的活用を目的に活動している三多摩地域の市民のネットワークづくりの契機となるような、先進事例の報告会としていくことにしました。

当日は約25名が府中市内外から参加されました。冒頭、淵野雄二郎東京農工大学名誉教授に、農地法を含む法令関係の見直しの展望と、そこから考えられる都市農業の今後の課題に関して、1時間ほどの基調講演をいただきました。

「三多摩自治体学校in府中」のパンフ

原耕造さん（生物多様性農業支援センター理事長）をコーディネーターとした事例報告コーナーでは、まず小平市で「みのり村」を主宰される農家の粕谷英雄さんから、元農業高校教諭の経験を活かし、農業に関する学びと収穫体験の楽しさを同時に味わえる体験型学習農場の取り組みを、多くの写真とともにわかりやすく紹介いただきました。

次いで、「市民による都市農業研究会」代表の日野市・佐藤美千代さんには、約200世帯から回収した生ごみを農地に投入して作物をつくり、援農と地域のごみ減らしをともに進めている「せせらぎ農園」について、「くにたち市民協働型農園の会」の菅井まゆみさんには、食育のための貸農園や田んぼ体験事業など、畑を使ったコミュニティ・ビジネスともいえる「くにたち　はたけんぼ」の取り組みについて（写真下の右端）、それぞれご報告いただきました。

竹内理事長からは、「田んぼの学校」「レンゲまつり」など、「府中かんきょう市民の会」の事業紹介がありました。

全体を通じて、行政と協調しつつ、現在の法的・行政的な規制やルールに対し、できるだけ突破を試みていくことにより、ユニークな農地保全につながっていくことが見えてきました。

そして、それぞれの意欲的な活動から「元気」をもらえる、とてもいい会であったと思います。このような交流の場が、また別の機会に設けられることを願います。（西宮幸一）

陸前高田市　被災地支援ボランティアに参加して

福島原発事故から4年近くが経過したが、市民の会ではこの問題を継続して取り上げていきたいと思っている。もちろん、市民の会の会員も執筆しているが、さらに執筆者の範囲を会員以外にも広げている。その趣旨にそって、小出由美子さんに原稿依頼した。（編集部）

2011年3月11日、穏やかな港の海面が、見る間に津波に飲み込まれていく。一体何が起こったのだろう？その時、行って、見て、話を聴き、ボランティアやヘルパーの経験を生かさなくてはいけないと思いました。

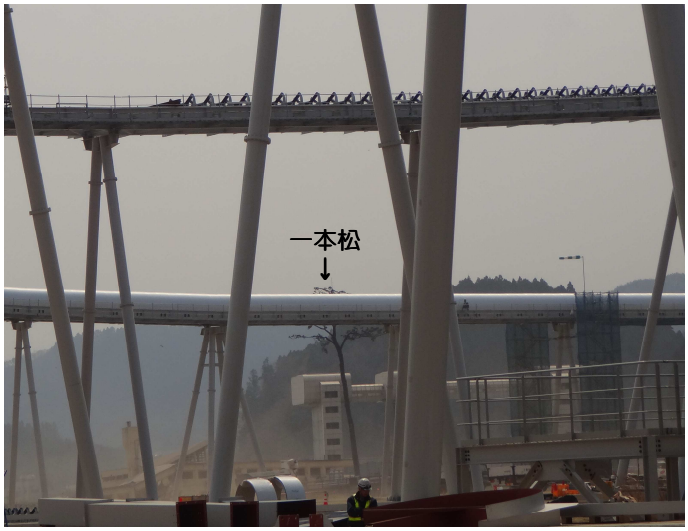
6月、早稲田大学YMCAの総主事で、キリスト教団体JMFの被災地支援コーディネーターから、ヘルパーの事業所「たすけあいワーカーズ」が東京で集まる「NPO法人アビリティークラブたすけあい」（略称：NPO法人ACT）に、仮設や戸建で孤立した人々の話を聴き、支援へつなぐ事ができないかという依頼がありました。私は早速参加しました。

ACT会員の母親が陸前高田市気仙町出身で、7月に仮設に入った友人の水野さんを訪問し活動が始まりました。その妹さんの大船渡の別荘が宿泊地でした。しかし、ご高齢のため継続は難しく、数少ない宿泊施設も復興の作業員でいっぱいでした。

仮設集会場で手芸　2012.12.14撮影

幸運にも、10月から、陸前高田市横田で農業を営む平坂さんご夫妻が、広大な農地に囲まれたお屋敷の別宅をボランティアに提供され、月一回の活動が始まりました。陸前高田市は、奇跡の一本松が残り、7万本の松林と市街地は跡形もなく流され、市役所職員の多くが亡くなりました。そのため、物資は滞り、復興が遅れていました。気仙川を挟む気仙町は、避難所から上流の仮設へ入り、新しい環境や人間関係で孤立している人々がいました。

月1回、数名の会員が交替し、JMFの運転で活動しました。青いエプロンをつけ、仮設や個人宅へ、炊き出しや手芸などをきっかけに話を聴きました。高齢者施設や子育て広場、作業所などへも活動を広げていきました。定期的に訪問するなか「また、ボランティアにきてくれてありがとう」と迎えてくれました。町の情報は、瞬く間に広がります。水野さんや平坂さんをみんな知っています。反面、本音を近所の人には話せない人もいました。しかし、繋がりがないボランティアに、本音が話せて、肩の荷を下ろす人もいました。この時程、傾聴の大切さを感じた事はありませんでした。



虹の架け橋　奥に奇跡の一本松（矢印で示す）2014.4.10撮影

仮設住宅は、3年位しか持たず、壊れ始めています。新居や団地に引っ越し、歯が抜けるように、仮設も閑散としてきました。2013年春、気仙町今泉地区の住民が「まちづくりプロジェクト」を市に提出。6月から突然山が崩され、まちづくりが始まりました。出た土を「虹の架け橋」と呼ばれる巨大なベルトコンベアーで、市内や宮城県の気仙沼市にかさ上げのため運びます。巨額な機械で大企業は儲かり、10年の作業が3年で終わるため、作業員も少なくて済みます。陸前高田の復興は進んでいると言われます。

しかし、市内を縦横に走るベルトコンベアーは、一本松より高く、砂ぼこりで洗濯も外に干せません。働く場がない若い人は、市外へ働きに出て、引っ越していきます。高齢者ばかり残り、仕事場もない突然できたまちに、一体誰が生活するのでしょうか。住民の声とはかけ離れた復興が、進められていいのでしょうか。

ACTも活動を縮小し、多くのボランティア団体も活動を終了しました。人々の関心は薄れ、ボランティアも少なくなりました。仮設から新居へ入っても、新しい生活やコミュニティーを再び作っていかなくてはなりません。復興は、これからが本番で支援が必要です。

10回以上のボランティア活動で、人と人がつながり、私の第2の故郷、生活の一部となりました。今後も変わらず、ともに生き、助けあって活動を続けていきたいと思います。

小出由美子さんのプロフィール
保育士やヘルパーの傍ら、世代をこえたまちづくりをめざし、居場所、情報交換、育成や府中市女性史の会などのボランティア活動を生かし、被災地支援に関わる。